

## フィールドワークを通じた2科目連携学習による 「地域への主体的思考」を育成するための指導の改善

The Improvement of Teaching for Cultivating "Voluntary Thought for Communities"

by Collaborative Study between Two Subjects through a Fieldwork

地理歴史科 栗山 絵理 松本 至巨  
藤野 敦 安井 崇

### <要旨>

平成25年度から施行される新しい高等学校学習指導要領において、地理Aでは読図や地域調査を通じた地理的技術の習得と諸課題を地理的に考察する力の育成、日本史Aでは現代社会の諸課題に対する歴史的考察、歴史を学ぶ意義に気付かせる学習、そして両科目ともに地図を含めた諸資料の活用等が重視されている。これを踏まえて地理歴史科では、以前から実施してきた地理実習（東京を題材としたフィールドワーク）を核として、地理A・日本史Aの2科目連携授業（チーム・ティーチング）や、地理実習の体験や観察事項を生かした地理A・日本史Aの授業を行うことにより、身近な地域について自ら主題や課題を発見し、さまざまな資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力（「地域への主体的思考」）を育てる指導方法を研究した。

<キーワード> フィールドワーク（野外調査） 地理 日本史 2科目連携授業 チーム・ティーチング  
科目間連携 地域への主体的思考

### はじめに—研究の課題

平成25年度から施行される地理歴史科の新しい高等学校学習指導要領は、全科目にわたって3つのことを重視している。その1つは、科目間の連携を図ることである。新指導要領の各科目の目標を見ると、歴史の諸科目では歴史の展開を「地理的条件」等と関連付けて、地理の諸科目では地理的な諸課題を「歴史的背景」等を踏まえて考察することが求められている。さらに、地図をはじめとする諸資料を活用すること、地域調査・見学等の活動を充実させることが、すべての科目で強調されている。

本校の地理歴史科の教科指導には、このような新学習指導要領の趣旨を先取りしている面が多くある。1年次の地理Aでは、東京を題材としたフィールドワークである地理実習を既に長年にわたって実施してきた。これは新指導要領が重視する地域調査の実践そのものである。また、地図をはじめとするさまざまな資料を活用することは、各科目の授業において日常的に行われている。

しかし、これをもって科目間の連携が十分に行われていると評価できるかといえ、そうは言えないだろう。歴史の授業で地図を活用したり、地理の授業で歴史的背景について説明したりしていても、各科目の担当者が他の科目の授業内容や活動を理解し、それを自分の科目の授業に生かしているというわけではないからである。

地理・日本史を担当する私たちは、このような現状認識に基づいて、国立教育政策研究所の「新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の改善工夫に関する研究」（平成21～22年度）の指定校事業の指定を受けた。そして、新学習指導要領の施行に向け、生徒にどのような力をつけさせるべきなのかということであらためて問い直すとともに、特に1年次の必修科目である地理Aと日本史Aの科目間連携を進めることを目指し、研究に取り組むことにした。

生徒に身につけさせるべき力に関連して、新学習指導要領は、歴史的・地理的思考力を培い「国際社会に主体的に生きる日本国民」を育成するという目標を掲げている。また、地理A・地理Bに共通する内容として、「生活圏」の諸課題や地域的特色をとらえる技能や見方・考え方を学習することがあげられている。

これらを踏まえて私たちは、地理A・日本史Aの連携によって生徒に身につけさせるべき力とは、身近な地域について自ら主題や課題を発見し、さまざまな資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力ではないかと考え、これを「地域への主体的思考」と規定した。そして、本校の蓄積を生かして「地域への主体的思考」を育成するためには、どのような取組をすべきか考えた。

前述の通り、本校では地理Aの授業の一環として、地理実習を実施している。1年生全員がグループに分かれ

て江戸城の外堀と皇居周辺を結んだコースを歩き、課題に取り組むこの行事は、1年次1学期の教科行事としては作業の質・量とも最も規模が大きい。それだけに、生徒にとっては強く印象に残る行事だと考えられる。

そこで、私たちは地理実習を地理Aと日本史Aの科目間連携を進める核として活用できるのではないかと考え、次の(1)~(3)の目標に向けて、表1のような実践に取り組んだ。

- (1)地理実習を指導方法の改善を図りつつ実施し、高等学校における野外調査の事例を提示する。
- (2)地理実習の体験や観察事項を題材に、地理A・日本史Aの教員によるチーム・ティーチングによる授業を実践し、2科目連携授業の実例を提示する。
- (3)地理実習の体験や観察事項を題材に、歴史的背景との関連を意識した地理Aの授業や、地理的要因を踏まえた日本史Aの授業を実践し、科目間連携を意識した授業の事例を提示する。

平成 21 年度	<p>5月 地理実習事前指導 【地理A】地図技能(地図の種類・図法・読図)、地形段彩図作成 【日本史A】江戸から東京への政治過程と都市の変化について</p> <p>6月 地理実習(フィールドワーク)と事後指導 【地理A】東京の地形・自然環境、都市と村落の発達経緯 【日本史A】近代都市への変貌</p> <p>11月 公開教育研究大会における授業公開 「地理と歴史の協業を通じて一地域をみる目一」 【地理A・日本史A 2科目連携授業】東京にみる景観の変遷と現代一地理実習を踏まえて 【地理A】東京の自然環境と都市構造 【日本史A】近代東京の町づくりと景観</p>
平成 22 年度	<p>5月 地理実習事前指導 6月 地理実習(フィールドワーク)と事後指導 *以上については平成21年度とほぼ同様だが、新たに日本史Aからも課題を与えた。</p> <p>11月 情報教育公開研究会における授業公開 【地理A・日本史A 2科目連携授業】関東大震災の被害と復興 *平成22年度情報教育公開研究大会の一環として公開し、HR教室に設置されたプロジェクタ・スクリーンの活用を図った。</p>

表1 研究の具体的な取組

以下、本稿では(1)~(3)の実践をその都度作成した資料や指導案をもとに整理するとともに、2年間の研究成果と課題を明らかにしたい。(安井 崇)

## 1 科目間連携の核としての地理実習

本校では1年次で開講される地理Aの一貫として、毎年地理実習を実施している。その概要は以下の通りである(資料1:実習帳抜粋,以下資料は本稿の末尾に掲載)。

- ①実施時期:1年次5月末または6月初め、1日をかけて全クラス一斉に実施。
- ②実施方法:1班4~5人のグループ行動、クラスによって集合場所を和田倉門、桜田門、日枝神社、四ッ谷、お茶の水に分散し、周回方向を違え皇居を中心に歩く。皇居一周約15~16kmを7時間以内に作業をしながら歩き、16時迄に出発地点に戻って解散。
- ③実施内容:生徒は地理実習帳、1万分の1の地形図を持ち、実習中に以下の課題をおこなう。

### (1)観察記の作成

(着眼点) a.都市の機能分化, b.都市形態・景観, c.都市と交通, d.土地利用の変容, e.地形的特質, f.国際化の進展

### (2)スケッチ

次の4つの候補から1地点を選択し、地形・建造物の特色に着目し景観をスケッチする。

- a.国会前庭から桜田門方面 b.喰違見付付近から赤坂方面 c.聖橋より秋葉原方面 d.桜田門から国会方面

### (3)通過地点の断面図の作成

次の4つの候補から1区間を選択し、台地と低地、堀と河川、旧江戸城との関係などを意識し、断面図を描く。

- a.猿楽町から神田駿河台(女坂) b.聖橋から万世橋(淡路坂) c.外堀通りから日枝神社 d.弁慶橋から喰違見付(清水谷)

### (4)土地利用等の調査

次のうち2地区について、業種別の凡例を作成して地図を塗り分け、土地利用の特徴等をまとめる。

- a.赤坂見附から日枝神社まで b.神田から日本橋まで c.日本橋 d.お茶の水

水準原点および小石川橋にて教員による解説を行う。実施からおよそ一週間後に地理実習帳を提出する。

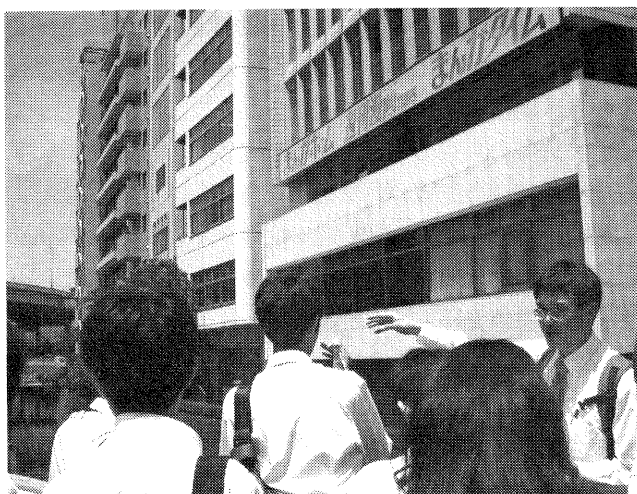


図1 地理実習（小石川橋にて）

本実習を通じて、現地での観察調査・考察を行い、地理的な見方・考え方を身につける機会を設けることをねらいとしている。

事前指導として、5月上旬に25000分の1地形図を使用して、10mごとに色を塗り分ける「地形段彩図」を作成し、谷地・台地や坂の地図上での把握を行う。また、10000分の1地形図で実習コースを辿るなど、地形図の活用についても作業を通じて学習する。この際、時代を離れた地図の活用も授業で着目する。例えば、本校が所在している世田谷区下馬付近の過去の地形図と現在の地形図を比較して、共通点（変わらないもの）と差異（変わっているもの）を見つけ出し、その時代についての情報を得る、考察をするなどである。実習で巡る東京については、日本史においても教科の対象として主要な地域である。江戸期以降の東京の変化・変遷について、日本史において地理実習に関連した授業内容が展開されることもある。

観察調査は地理の基本であり、教室内の授業ではまかないきれない事柄を多く含んでいる。地図上で得た情報を現地で確認するとともに、地図上では得ることができなかった情報を現地で収集することができる。また、現地で行う基本的な調査技能（スケッチ、断面図作成、土地利用調査など）を通じて、日本の首都である東京について立体的な理解を促すことができる。

事後指導として、東京都市部を広域な視点から位置づける内容が展開される。例えば、「地形」に着眼して東京都全体の構造から特徴を考察する、「都市」に着眼して都市内部構造を学習するなど、実習を通じて観察した地域を系統地理的な分野で考察をするなどである。このような学習を通じて、地域を違えてもより深い考察がで

きるようになることもねらいとしている。

さらに、1年次の地理Aの一環として、3学期（1月から3月）に「発表学習」の時間を設けている。ここでは、生徒主体の問題提起から文献調査・地域調査・統計調査・データ処理・プレゼンテーションを行う機会を設けている。これも全クラス共通で、5～6人のグループで調査活動を行うものである。地理実習と直接的に関連したテーマを設けるよう指示はしないが、これまでに都市構造について理解を深めるテーマに取り組んだグループもあった。

実習成果の展開として、発表学習の場が活用されるようになると、一貫性が増し、1年を通じて実習を核として理解が深められる。また、1年次で学習する日本史Aとも連携することで、生徒には総体的な理解を促すことができる。より一層地理実習を活かした指導計画を、今後さらに視野に入れていく必要があると考える。

（栗山絵理）

## 2 地理A・日本史Aの2科目連携授業

地理実習の体験と観察事項を教室での授業で生かす試みとして、地理A・日本史Aの教員のチーム・ティーチングによる2科目連携授業を行った。平成21年11月の本校の公開教育研究大会「新教育課程における課題と展望」において、地歴公民科は「地理と歴史の協業を通じて一地域を見る目」と題して3つの授業を公開し、そのうち「東京にみる景観の変遷と現代」（資料2：指導案）をこの形態で実施した。また、平成22年11月には情報教育公開研究会の一環として同様の形態の授業「関東大震災の被害と復興」（資料3：指導案）を公開した。

### 2-1 東京にみる景観の変遷と現代

#### 2-1-1 授業の概要

本実践は地理実習をふまえ、様々な年代の地図・地形図を活用し、現代の景観に至る歴史的背景および自然環境等の要因を理解し、長期的な展望や視点を獲得することを目標とした。水路の開削・農地開発・埋め立てなどの大規模開発によって形成された近世以来の歴史的変遷や地理的諸条件が、近代以降の流通や交通、商業地や工業用地の形成、地形や自然など、現代に至る東京の様々な都市機能・景観に影響を与えていることはいまでもない。本実践では、現代の東京を理解・考察する上で、近代の首都として設定された理由を分析基点としながら、近代以前の過程にも触れ、歴史的な時間軸・地理的な空間軸から現代の東京が抱える諸問題への対処を考

察・展望する視点を学習することを目的とした。授業は1学期の地理実習（地域調査）の学習成果に基づいており、地理実習の学習成果としては、次のような事柄が指摘できる。

#### ①観察・計測

運河・河川や高速道路などの東京の都市景観、皇居周辺の近世来の継続的な景観、さらには官庁街や商業地域などの土地利用、さらには一地域内の店舗利用調査などの観察成果。台地の末端における地形計測データなどの計測成果

#### ②実感をともなう感覚的記憶

距離感や高低差などの認識成果の活用。

#### ③事前学習の知識

地理 A や日本史 A における事前学習事項の活用。



図2 授業風景（東京に見る景観の変遷と現代）

### 2-1-2 1時間目の授業展開

授業構成は2時間とし、1時間目は地理実習の成果の確認と、実習対象地域の地形的構造の全体的構造認識、さらにはその地域の地形的な歴史的背景を理解することを目的として、次のような内容で展開した。

**導入** 前述した地理実習の学習成果の想起を目的とする活動（実習時の写真をスライドショーで提示）。

#### 展開Ⅰ 東京の地理的特色・構造。

現代の地形図の等高線をたどる作業などを通じ、実習時に歩いた地域の高低差を再認識する。台地、低地の確認をした上で、縄文期の海岸線の確認、日比谷入り江埋め立て、上水の開削や市街地の水道管理設などを事例とした近世初頭の開発を地形図から確認した。

#### 展開Ⅱ 江戸が明治の首都となった経緯。

近代初頭の前島密の江戸建白案を中心に、大名屋敷の官庁への利用や市街地拡大の可能性、巨船時代への江戸

湾の利用など、その地形的・政治的特色を中心に首都建白に至る過程を考える。

#### 展開Ⅲ 明治の都市計画の変遷。

近代以降の東京の都市計画の変遷から、地理実習の学習成果の理解の位置づけをおこなう活動。

現代の官庁街の区画と近世の大名屋敷区画との関係などを、丸の内地域などを事例として提示し学習した。

#### まとめと課題提示

最後に、前島の江戸遷都の建白にもどり、近代国家建設における当時の首都としての展望は、現代までの東京の都市建設・構造と比較して建設において、どのような関係にあるかを考えることを提示し、2時間目へと結びつけた。

### 2-1-3 2時間目の授業展開

本時の目的は、以下の4点である。第1に流通や交通、商業地や工業用地の形成、地形や自然など、近代の東京及び現代の東京の様々な都市機能・景観の特徴を、読図や実習の成果から理解すること。第2にそれらの都市構造が歴史的な背景の中で、どのように形成されたかを理解すること。第3に、現在進行している中心地の大規模開発が、地形的・歴史的諸条件による規定の影響をうけつつ進められていることを理解すること。第4に、これらを踏まえて、都市の将来像を考察・展望する視点について、歴史的な時間軸・地理的な空間軸など、多角的に発想を促すことを目的とした。

#### 導入

#### 展開Ⅰ 実習中の活動を例に都市構造を考える。

地理実習では神田川・日本橋川分岐点である小石川橋において、以下の2点を既習している。

- ①近代に至る神田川の流路の変遷（本郷台地と神田川の高低差の観察や、都市河川の特徴の観察）。
- ②物資流通と河川の役割（近世河川流通、近代の飯田町駅と鉄道、現代の首都高速道路。また、近世の物流経路が現代でも地域のゴミ処理に利用されている実態を確認している。）以上の事実について、本授業では、地形図における読図からの確認と理解をおこなった。

#### 展開Ⅱ 現代東京の景観と歴史的結節点。

現代東京の景観の特徴の一つとなっている首都高速道路の建設についてその歴史的過程を確認し、近代以後の他の都市計画と比較し、極めて短期間で建設がおこなわれた事実を確認した。その上で、首都高速建設が短期間で実現した理由を考察課題として提示した。現代の地形

図に首都高速のルートを示し、その後、近世の地図と対照させて、近世以来の運河等を利用して建設されていることを確認した。

### 展開Ⅲ

六本木ヒルズや東京ミッドタウン、汐留シオサイトなど、近年のインナーシティ開発の区画を現代地形図で確認し、その後、近世地図と対照させた。その中で大規模開発の区画が、大名屋敷の区画とほぼ一致している事実を確認した。

### まとめと考察

展開Ⅰ～Ⅲをふまえ、まとめとして次の2つの問いを用意した。

- ①「汐留シオサイト」が現在の地域に開発された経緯を説明しなさい。また、なぜ近年、その地域が開発地として選ばれたのか、背景を考察しよう。
- ②現代の土地利用が歴史的な経緯でさまざまな制約を受けている事実を考慮して、現代に生きる私たちがどのような視点をもって開発を進める必要があるのか考察してみよう。

①については、現代の地形図の中の「旧国鉄貨物駅」との記載から、展開Ⅰに関連して、流通の変化とのかかわりから土地利用の変化を想起させることを要求しており、②については歴史的な視点から、次代を見据えた現代への対処の視点育成を促すことを目的とした。これらは論述・提出課題とした。

(藤野 敦)

## 2-2 関東大震災の被害と復興

### 2-2-1 授業の概要

本実践は、チーム・ティーチングの形で、関東大震災の具体的な被害状況と震災復興事業について、歴史的経緯とともに、地理的視点からの考察を加えようとしたものである。

日本近代史について学習する日本史Aの授業では関東大震災について当然取り扱う。その際、一般的には、関東大震災が日本経済に深刻な打撃を与えたこと、地震の後の混乱の中で朝鮮人や労働運動家・社会主義者等が不当に殺害されたこと等を指摘し、「大正デモクラシー」から戦争の時代への流れの中に位置付ける。一方、地理Aの新しい学習指導要領の内容として「(2)生活圏の諸課題の地理的考察」には「イ 自然環境と防災」「ウ 生活圏の地理的な諸課題と地域調査」の項目が含まれている。

以上のことを踏まえて、本実践では関東大震災の授業

に地理的視点を取り込むことによって、地震や被害の真相をよりリアルに理解させる（この点は一般的には従来の日本史の授業では手薄だったように思われる）とともに、生活圏における防災の問題を歴史的視点から考えさせることを目指した。また、教室に設置されているプロジェクタやスクリーンを使用して地図・写真の活用を図るとともに、地理実習の事前指導の一環として作らせている地形段彩図、地理実習の課題として課されているスケッチや通過地点の断面図等を利用して、地理実習で現場に立った体験を教室の授業で生かすことを試みた。

なお、この授業の構想に際しては、前年度に実施した日本史Aの実践（本稿3-2参照）を参考にしており、取り扱う内容には重なる点もある。

### 2-2-2 授業展開

授業は次のような手順で進めた（詳細は指導案を参照されたい）。

#### 導入 東京都慰霊堂

プロジェクタで東京都慰霊堂の写真を投影し、この場所に行ったことがあるかどうか等を生徒に問いかけて認識と興味の程度を見極めつつ、普段日本史を担当している安井から、東京の近代史において震災と戦災が決定的に重要な意味を持っていることを説明した。

#### 展開Ⅰ 関東大震災の概要と東京の被害状況

関東大震災の被害状況について、プロジェクタと配布プリントを使用して安井が解説したうえで、授業の進行担当を地理の松本に交替して、東京における揺れの被害（震度）と火災の広がりについて、生徒を男女に分けて次の検討作業を行わせた。なお、授業を実施したクラスでは男女の座席が並んでおり、このような分担をさせると机が並んでいる生徒がそれぞれ異なる課題に取り組む形になるので、作業中は周りの生徒と話し合いや相談をしても良いことにし、震災の被害状況について生徒が自分たちで考える状況を作り出そうとした。

- ①東京都震度分布地図と地形・地質を示した地図(1460年の東京等)を比較検討して、どのような場所が激しい揺れに襲われ、どのような場所の揺れが比較的小さかったかを考える。
- ②火災系統地図と地理実習の事前指導の際に生徒が作成した地形段彩図を比較検討して、火災が広がったのはどのような地域で、どのような場所で延焼が止まっているかを考える。

生徒の検討結果をそれぞれ数名ずつ発言させ、それを踏まえて松本が、元々入江や低湿地だった場所は震度が

大きいこと、火災が広がったのは下町の低地で、下町と山の手の境目や大きな公園・緑地のある場所で火災の延焼が止まっていることを確認した。また、震災の際、最も多くの焼死者が集中した被服廠跡の空地は、公園の整備計画があったもののまだ未整備で、樹木等がなかったため、周辺から吹き込んだ炎が罹災者の家財道具に燃え移り、火災旋風が発生したことも説明した。

## 展開Ⅱ 震災復興計画の展開

ふたたび授業の進行担当を安井に交替し、内務大臣後藤新平が立案した震災復興計画と実際に実施された事業（区画整理、道路・橋の整備、震災復興公園と小学校）の概要についてプリントを配布して説明した。その際、地理実習で作業を行う女坂が震災後の区画整理が最も早く行われた場所の1つであることにも言及した。

ここで、進行担当を松本が代わり、生徒に震災後の火災の被害の最も深刻だった中央区周辺の10000分の1地図を配布し、次のような作業を行わせた。

○公園や緑地がある場所に色鉛筆で色を塗らせ、周辺にどのような公共施設があるかを確認する。

これによって、公園と小学校が隣接して設けられていることを、作業を通じて確認させたいうえで、松本からこのような立地は、通常の時期には小学校の校庭と公園を一体のオープンスペースとして活用し、災害時には鉄筋コンクリート製の校舎と樹木を防火壁として避難場所を確保するという震災復興計画の構想によって実現したことを説明した。この際、事前に安井と松本で撮影してきた現存する復興公園・小学校の写真や、復興計画の研究者のWebサイトに掲載されている画像をプロジェクトで投影し、活用した。

### まとめ

展開Ⅱで使用した画像を見て既に生徒から「附属高校と似ている」という声が上がっているのを受けて、松本から昭和9年に完成した本校の校舎は復興小学校と同様のデザインで設計されており、耐震性も非常に高いことを説明した。最後に安井から景観や建物から歴史が考察できることを述べて授業を終えた。

## 2-2-2 授業の検討・反省

実際に授業を実施してみたところ、写真の投影や切り替え、生徒の作業には当初考えたよりやや時間がかかり、予定した授業内容の大枠はこなすことができたが、当初予定していた資料をすべて使用することはできなかった。授業内容をさらに精選する必要がある、また、パソコンのオペレーションを含めた段取りについては改善す

べき点が残った。

チーム・ティーチングは自分1人で授業を作るのに比べて、内容や分担を決めるのに手間がかかる面は確かにある。しかし、他の科目を担当している教員の教材に対する見方や扱い方を直接知ることができ、双方の教員にとって良い刺激になるということを、今回の授業を通じて実感することができた。また、進行がうまく行けば、チーム・ティーチングは授業のペースが自然に何度か切り替わることになるので、生徒にとっても集中力を保ちやすいように見えた。今回の授業は地理歴史科における野外調査の活用と科目間連携という視点から構想したものであるが、チーム・ティーチングという授業形態には他にもさまざまな展開の可能性があるとされる。（安井 崇）

## 3 科目間連携を意識した地理A・日本史Aの授業

地理と日本史の科目間連携を進めるためには、前章で提示したような2科目連携授業も有効ではあるが、学校における多くの授業は今後も科目ごとに行われていくはずである。科目間連携を定着させていくためには、それぞれの科目の授業の中でその理念を生かしていくことが不可欠である。そこで、平成21年度の公開教育研究大会では、歴史的背景を踏まえた地理Aの授業「東京の自然環境と都市構造」（資料4：指導案）、地理的条件との関連付けを意識した日本史Aの授業「近代東京の町づくりと景観」（資料5：指導案）を実践・公開した。

### 3-1 東京の自然環境と都市構造

地理実習の課題には東京都心部の平野と台地の境目に注目してスケッチを描いたり、地形を計測したりする課題が含まれている。これを踏まえて構想したのが本授業である。授業の手順や進行については資料4に譲り、授業内容の要点を整理すると以下のようになる。

東京都心部は、沖積平野と洪積台地の2つの地形にまたがっている。更新世に堆積し、その後の約2万年前の氷期の海退にともなう河川の下刻作用から取り残された地域が洪積台地である。約2万年前に河川の侵食を受けた地域には一時的に深い谷が形成された。それ以降、約6000年前までの間に起こった海進により、その谷は利根川をはじめとする河川による土砂の堆積が進行し、埋積谷となった。さらに約6000年前から現在に至るまでの間に若干の海退がおこっているが、その間にも河川の堆積作用は進行し、陸化が進んだ。このようにして形成された陸域が沖積平野となっている。河川が東京湾に注

ぐ河口付近には三角州が発達し、土砂の堆積にともない三角州は沖に向かって発達し、沖積平野は広がりつつあった。しかしながら、17世紀に江戸幕府によって行われた利根川の河川改修工事により、利根川は中流部で鬼怒川と合流する形で流路を変更され、以降現在の千葉県銚子市付近から太平洋に流出するようになった。利根川が東京湾に流入しなくなってからは、大量の土砂を運搬する河川がなくなったため、河川による三角州の発達速度は小さくなり、代わって人間が行う埋立によって陸化が進むこととなる。

洪積台地には、神田川や渋谷川（古川）、石神井川などの小河川が流れ、小規模な谷を形成している。以前はこの谷の側面から地下水が湧出し、小河川はこれらの水を集めて流れていた。小河川が形成した小規模な谷には、小河川が運搬・堆積した沖積層が堆積した。また、小河川は流れが弱いため、河口付近が波浪などの海の影響により土砂で閉塞されることがしばしばみられ、そこには小規模な池沼や湿地が形成された。その例が上野の不忍池や赤坂付近にみられた溜池である。

東京都心部では、これらの地形の違いが都市の発達や景観に大きな影響をおよぼしている。一般に東京では、沖積平野（東京低地あるいは下町低地）の地域を下町、洪積台地（武蔵野台地、東京特別区では山の手台地ということもある）の地域を山の手という。

東京では、徳川家康の江戸建設以降、本格的な都市の建設が行われてきたが、都市計画を行う上でこれらの地形が考慮され、うまく利用されている。基本的には武家地が山の手、町人地が下町という構造になっている。この構造が、明治維新以降の都市計画にも大きな影響を与えている。広大な敷地を持つ武家地が官庁や貴族の邸宅に利用され、町人地は商店や問屋が立ち並ぶ商業地域となった。このような形態は、関東大震災や第二次世界大戦による戦災を経た現在においても基本的には変化しておらず、東京都心部を実際に歩いてみるとその様子を観察することができる。また、これは土地利用だけでなく、土地区画についても同様で、旧武家地の山の手では土地の1区画が大きく、旧町人地の下町では区画が小さく、建造物が密集している。先述の地理実習では、地形と土地利用、土地区画を中心に観察し、東京都心部の都市構造について考察させている。

都市の学習では、都市の存在する地域の自然基盤と都市の発展、都市構造の変化、都市における問題について取り扱う。このうち、自然基盤については地理が担当し、都市が歴史的にどのような発展を遂げたかについては日

本史で学ぶことにする。また、歴史的な変化の結果、現在の都市がどのような構造を持っているか、その都市がどのような問題点を抱えているかについては地理で取り扱う。近年、世界各地で都市化が進んでおり、都市の内部ではさまざまな問題が発生している。地理では、世界の多くの都市と比較することによって、都市構造の差異やさまざまな問題について考察し、だれもが健全な生活を送ることができ経済活動のしやすい都市をつくるにはどうしたらよいかを探る。（松本至巨）

### 3-2 近代東京の町づくりと景観

この授業は、日本史Aの関東大震災についての授業の中で、地理実習の観察内容を生かそうとしたもので、関東大震災の被害状況と復興計画の概要を理解し、その歴史的意義について考察することを目的としている。

授業の進行は資料5の通りだが、地理実習と関連する点に重点を置いて整理すると以下の通りである。

**導入** 地理実習の際に観察した駿河台女坂の異なる年代に撮影された写真をプロジェクタで投影し、都市の町並みが時代によって変わっていくことを確認するとともに、女坂の上部にある標識にはこれが1924年（関東大震災の翌年）に造成された旨が記載されていることを指摘する。

#### 展開1 関東大震災の被害状況

関東大震災が「大正デモクラシー」の時代と戦争の時代の転換点にあることを指摘したうえで、関東大震災の震度、発生時の気象条件を紹介し、震度と揺れによる被害、火災による被害、流言飛語による被害の状況を簡潔に確認する。そのうち、東京での死亡原因のトップである火災の被害について、もっとも多く死者が出た被服廠跡の火災旋風について説明したうえで、火災による消失区域の地図（プリントを配布するとともに「帝都大震災火災系統地図」の復刻版を黒板に掲示）と地理実習の事前指導で地形段彩図を作成する時に使った東京の25000分の1地図（プリントして配布するとともに拡大コピーを黒板に掲示）を比較検討させる。生徒を指名して黒板の地図の10mの等高線にマジックで線を引かせ、消失区域がおおむね下町の低地であることを確認する。

#### 展開2 震災復興計画と復興事業

震災復興計画を立案した責任者である後藤新平内相の略歴を紹介し、震災復興計画の立案と計画縮小の過程を簡潔に説明する。実施された事業について区画整理（対象地域を示す地図を配布）、道路と橋の整備（道路の整備状況を示す地図を配布）、復興公園と小学校（計画図

を配布)して、現在の東京の都心や下町地区の町並みの原型が震災復興事業によって形成されたことを確認する。

### 展開3 震災復興計画の痕跡

震災復興計画の痕跡が現在の東京にも残っていることを、京橋公園(震災復興公園として開園し、当時の滑台が現存)、元町公園(震災復興公園の1つで、1980年代に開園時の意匠を生かした整備が行われ、開園時の原型をとどめている)の現在の写真をプロジェクタで投影して説明する。町並みや公共施設の外観そのものがその土地の歴史を明らかにする文化遺産としての性格を持っていることを明らかにする。なお、この部分での使用を想定して、学校から徒歩10分程度のところにある鶴ヶ久保公園(震災後に実施された区画整理によって生じた空地を地主が東京市に寄付して開園された公園で、現在でも「東京市鶴ヶ久保公園」の標識が残っている)の画像も用意したが、時間の関係で割愛した。

### まとめ 震災復興計画と現在の東京

以上のような形で授業を実施したところ、導入の女坂の写真については特に生徒の反応が良く、日本史Aの授業の導入教材として地理実習のコースは有効に活用できることが確認できた。ただ、それ以上に注目したいのは、火災の延焼状況と東京の地形図を比較検討する部分で、指名した生徒に10mの等高線が引かせると、生徒から自然と声があがったことである。生徒が「地理の課題」だと思って取り組んだ作業を素材として、生徒が気づいていなかった歴史を分析するための情報が引き出せるということを示すことによって、生徒の知的好奇心を刺激することができたように思われる。

この授業を行うことを通じて、地理実習が歴史の学習のベースとしても非常に有意義であることを実感することができた。その場合、歴史への興味・関心を喚起するための「小道具」として地理実習における観察事項を利用することも可能だが、それだけにとどまらず、同一の素材(この授業の場合は地形図)を地理と日本史といった異なる観点から分析・考察することによって、地理歴史科の学習に対する生徒の固定したイメージを揺さぶり、知的好奇心を刺激することができるのではないかと、いうところに大きな可能性を感じた。

本論文の2-2で紹介した2科目連携授業「関東大震災の被害と復興」は、そうした可能性を追求する1つの試みでもあったが、今後も地理歴史科、さらには公民科を含めた科目間連携を進め、地道に授業の改善を図っていききたい。(安井 崇)

## 4 本研究の成果と課題

地理実習を中心とする2年間の実践を通じて、次のような点が成果として確認できた。

- ①東京という身近な地域について生徒の関心を喚起し、地理的な技能を習得しつつ、都市構造やその成立過程について学習させる機会として、地理実習は非常に有意義だと考えられる。教室での地理や日本史の授業にはかならずしも積極的に取り組んでいるとは言えない生徒も含めて、参加したすべての生徒がグループで全行程を踏破し、実習帳を提出することができた。
  - ②地理A・日本史Aの科目連携授業は、現在の東京が抱える諸問題を考察するためには、地理的条件や歴史的背景を考慮した多面的・多角的な考察が必要なことを学習する機会として有効である。特に、同じ問題について、地理担当と日本史担当の教員が異なる視点から論じる様子を生徒に見せることによって、科目の縦割りになりがちな生徒の学習のイメージを揺さぶることができたように思われる。また、教員にとっても、異なる科目の担当者と共有できる教材を発見し、授業づくりを行うことで、自分の科目の教材研究に対するさまざまなヒントをえることができた。このような形態の授業は、現在の学校の授業担当の在り方を前提にするとそれほど頻繁には実施できないが、限られた機会であっても授業内容や進行方法の工夫によって、より効果的な授業を実施することはできるだろう。
  - ③地理歴史科における科目間連携を進める上で、フィールドワークはその核として教育的価値が高い。今回の研究を通じて、地理や2科目連携授業についてはもとより、日本史の教材としても地理実習が大きな意義を持っていることを認識することができた。全生徒が東京の町を実際に歩いて観察した経験を持っていることは、今回の研究で公開した授業以外の単元でも活用できるはずである。
- 本研究の目標である「地域への主体的思考」の育成という観点から見た場合、地理実習やそこでの体験や観察事項を教材化して実施した2科目連携授業や地理A・日本史Aの授業は、「さまざまな資料に基づいて地理的・歴史的に考察する力」を育てるという点で、確かに一定の成果をあげていたように思われる。
- しかし、「地域について自ら主題や課題を発見」する力を育てることができたかどうかという点については、今後多くの課題を残していることは否定できない。そもそも、現在行っている地理実習やこれに関連する授業においては、考えるべきテーマは教員から提示されてい



るわけで、これを自ら課題を発見する力につなげていくためには、地理実習や授業に何らかの新しい仕掛けが必要になってくるだろう。

現在本校で行っている授業の中で考えると、前述の通り、地理Aで3学期に行っている「発表学習」の指導に地理実習を生かす工夫をすることで、「地域について自ら主題や課題を発見」する力を伸ばすことができるかもしれない。しかし、今後に向けてより根本的に「地域について自ら主題や課題を発見」する力を育てる方法を開発し、定着させていくことを考えるなら、今回の研究では地理実習やこれと関連する授業に対する生徒の反応を客観的に把握する努力が不十分だった点を反省すべきだろう。当面、地理実習の結果生徒の東京に対する認識やイメージがどのように変わったかを評価する機会を事前・事後の指導の過程に組み込み、その結果をフィードバックしていくことが必要だと考えられる。

今回の研究では、取り扱う内容の制約から、日本史B・地理Bといった選択科目や、世界史Aや世界史Bとの科目間連携については具体的な取組ができなかった。特にすべての生徒が履修しなければならない世界史と他の科目の連携をどのように構築するかということは、高等学校の地理歴史科にとっても最も重要な問題の1つである。とはいえ、地理歴史科の指導において科目間の連携が重要であることと、その核として地理実習のような野外調査の教育的意義が極めて大きいことは確認できたように思われる。今後も地理実習とこれを中心とした授業の改善に地道に取り組むとともに、多様な視点と方法によって科目間の連携を進め、授業の充実を図っていきたい。

#### 補論 地理歴史科の授業におけるICTの活用について

本論文で言及した授業のうち、「2-2 関東大震災の被害と復興」は、平成22年度情報教育公開研究大会「ICTを活用した各教科の授業」（これについては教育工学委員会による論文が本紀要に掲載される）の一環として公開したが、本論文の2・3で紹介した授業はすべてHR教室に設定されたプロジェクタとスクリーンを活用している。

地理や歴史の学習においては、興味関心を喚起し、理解を深めるために現場を見ることが大切なことは言うまでもない。しかし、当然ながら、学校の年間のスケジュールの中で校外での実習を行うことができる機会は限られており、また、授業内容と関連する場所や施設をすべて見に行くことはできるはずがない。そこで、地理歴史科・

公民科や社会科では従来からさまざまな視聴覚教材が使用されてきた。

しかし、画像や動画の編集には技術や労力がかかることに加え、それを上映したり投影したりする設備も必要で、一定の環境が整わないと視聴覚教材の自由な活用は難しい。本校では一昨年にすべてのHR教室にプロジェクタとスクリーンが設置され、授業と授業の間の10分の休み時間でパソコンやDVDプレーヤーの接続が簡単にできるようになった。授業で画像や動画を活用すること自体は決して目新しいことではないが、このような環境が整備されたことによって、多種多様な視聴覚教材を最小限の労力で日常的に利用することが可能になった。地理歴史科の授業にとって、このことのメリットは極めて大きいはずである。その可能性をどこまで生かすことができるか、教員の工夫と力量が問われることになるだろう。

(安井 崇)

(平成23年1月11日投稿)

【資料1】

(1) 実施要項

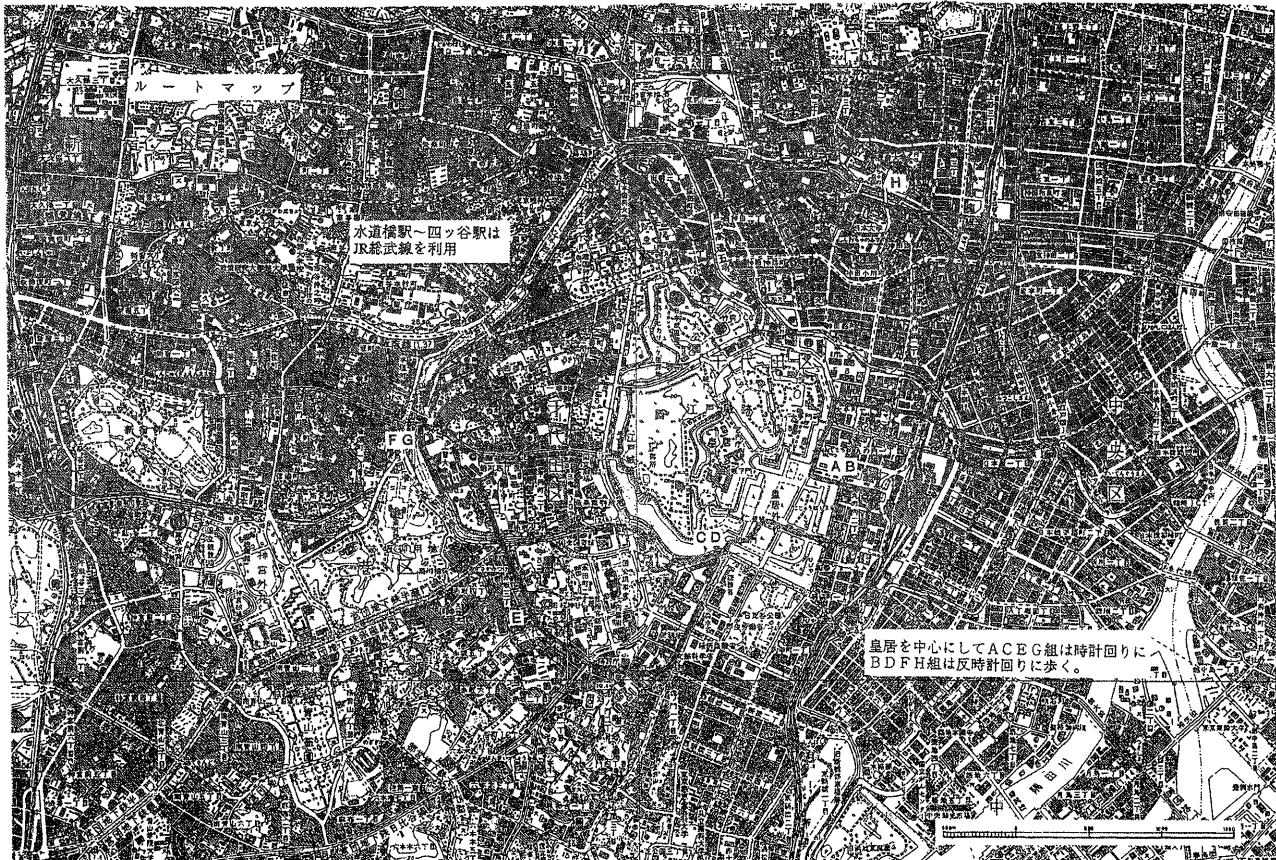
1. 目的： 地理学習の一貫として、日本の政治・経済・文化の中心である東京都市部の観察実習によって、地理的な見方、考え方の手法を身につける。
2. 日 時： 6月1日(月) 午前9時～午後4時
3. 集 合： 午前9時00分(午前8時45分から出発点呼開始)  
 A B組 豊原外苑和田倉噴水公園  
 C D組 桜田門  
 E 組 日枝神社入り口(山下交差点)  
 F G組 上智大学前土手の上  
 H 組 お茶の水(新お茶の水ビル前)  
 全員そろったグループから出発する。
4. 解 散： 午後3時30分～4時00分  
 集合地に集り、担任教員の点呼を受ける。  
 全員そろったグループから点呼後解散。
5. 見学経路： 別紙
6. 注意事項：
  - (1) 制服着用のこと。常に4～5人のグループで行動し、単独行動はとらない。
  - (2) 集合場所・集合時間を厳守のこと。集合解散場所では学年教員の出欠点呼を受け、地歴・公民科教員の指示を受けること。車には十分注意し、事故のないように気をつけること。
  - (3) 指定された観察および実習項目以外の地形の特徴や都市景観にも十分注意し、観察すること。
  - (4) 当日やむをえず欠席する場合は、6時30分までにクラス担任教員(自宅)に電話連絡すること。
  - (5) 行動中に緊急事態(事故等)が生じた場合は、3421-5151へ電話し、指示を受けること。
  - (6) この実習は、「地理」の授業6時間に換算する。なお、この実習帳は学習評価の重要な資料とする。
  - (7) この実習帳の提出期限は6月15日(月)昼休み中である。HR委員は名票順に重ねて地歴・公民科研究室に持参すること。

7. 作 業： 当日おこなう作業は次の通り。

- (1) 観察記の作成  
 歩行中に観察した事物の景観の記録。その際、次のことに注意すること。  
 都市の機能分化……特定の場所への機能の集積を具体的にとらえる。  
 都市形態・景観……街路の状況、建造物の特徴、土地区画など。  
 都市と交通……現在の交通ばかりでなく、過去の交通(河川、運河等)との関係にも注意。  
 土地利用の変容……観察された現在の土地利用と過去の土地利用の比較。  
 地 形 的 特 質……特に台地と低地、台地を割む谷地に注意。地形と土地利用の関係にも注意。  
 国際化の進展……外資系企業、外国人の活動及び都市景観の中で、外国の影響を受けているものを把握する。
- (2) スケッチ  
 つぎの地点から1地点を選び、景観のスケッチをすること。美術の授業ではないので美的センスは要求しない。ただし、地形や建造物の特色が明確にわかるようにすること。  
 (30分程度ですませる)  
 国会前庭から桜田門方面      喰違見付付近から赤坂方面  
 聖橋より秋葉原方面      桜田門から国会方面
- (3) 通過地点の断面図の作成  
 次の各地点間から1地点間を選び、断面図を描く。台地と低地、堀と河川、江戸城の関係を考えよう。  
 豊原町から神田駿河台(女坂)      聖橋から万世橋(淡路坂)  
 外堀通りから日枝神社      弁慶橋から喰違見付(清水谷)
- (4) 土地利用等の調査  
 実習帳P20、P21に示した地区の土地利用・景観・機能について調べる。

(2) コース概要

ほぼ江戸城の外堀を一周するコースである。距離は16km。土手の上の遊歩道あり、街路樹のある道あり、活気のある商業地区ありといったように、変化があっても歩くだけでも楽しいコースである。しかし、何もしないで歩いて4時間程度はかかる。作業等はてきぱきとこなすことが必要である。



【資料2】 東京にみる景観の変遷と現代—地理実習をふまえて—

東京学芸大学附属高校  
地理歴史科 藤野 敦  
栗山 絵理

本校生徒の「生活圏」であり、日本の首都機能を担う「東京」に着目し、1学期に行った「地理実習（地域調査）」の成果を基に、「水（河川・水路）」「土地利用」「再開発」という観点から歴史と地理の協業を目指した授業を実践する。

新しい高等学校学習指導要領によれば、「地理A」では読図や地域調査を通じて、地理的技能を習得し、諸課題を地理的に考察する力の育成が求められている。一方、「日本史A」においては、現代社会および現代的諸課題の歴史的形成過程への観点からの考察を促す活動を通して、歴史への関心・学ぶ意義に気づかせる学習が示されている。また、地図を含めた諸資料のいっそうの活用を促している。

本校の「地理実習」をふまえ、本授業は、東京の様々な年代の地図を活用し、水路の開削・農地開発・埋め立てなどの大規模開発によって形成された近世都市江戸および周辺農村から成立した歴史の変遷が、流通や交通、商業地や工業用地の形成、地形や自然など、近代の東京及び現代の東京の様々な都市機能・景観に大きな影響を与えている。これらをふまえ、現代の東京が抱える諸問題への対処を考察・展望する視点を歴史的な時間軸・地理的な空間軸から学習の過程として位置づけていきたい。

<1時間目>

	項目	提示事項	資料および活動
導入	東京景観 地理実習写真Ⅰ	6月実施の地理実習時の景観等の想起	写真スライド利用
展開Ⅰ	東京の地理的特色・構造 ・武蔵野台地 ・台地と海岸線 ・上水の必要性  地形の変遷 ・近世初期の江戸開発 ・水（流通・飲料水） ・江戸の井戸	・（事例）埋め立て（日比谷入り江の埋め立て） 土砂800万立方メートル 11tダンプ 133万台分 並べると1万キロ	・（作業）現代の地図上の10m等高線をなぞる。  ・上水経路 ・埋設水道管配置図
展開Ⅱ	江戸が明治の首都となった経緯 ・政治状況 江戸城の開城 ・地形的な利点 ・首都機能の継承（大名屋敷が公共施設へ）	前島密建議書 ・江戸湾は巨船時代に対応 ・都市発展の地理的可能性 ・市街地の広さと将来的余地 ・公共施設建設の経費節減など提示	前島密建議書
展開Ⅲ	明治の都市計画の変遷	・大名屋敷と官庁設置 ・銀座の煉瓦街 ・多種多様な都市計画とその挫折（丸の内、兜町など）	VTR(5分使用)
まとめ	・前島密建議書の見通しと現代の東京		前島の建言を、実際の東京のその後の発達と比較する。

<2時間目>

	項目	提示事項	資料および活動
導入	東京景観 地理実習写真Ⅱ ・江戸との接点と小石川橋	・「汐見坂」地名由来 ・天守跡 ・小石川橋	写真
展開Ⅰ	神田川の題材 （問）地形と流路の矛盾  神田川周辺の流通の変遷 江戸初期から明治、現代への変遷 ・物資流通網の変化 運河・船から鉄道、道路へ  （現代）ゴミ処理船の利用 船はどこに向かうのか。	・台地を横切る川 人工的な開削の確認  ・近世の流通網としての利用 江戸湾→隅田川→神田川 ・近代の日本橋川の開削と飯田町駅・甲武鉄道  かつての流通ルートを、現代は廃棄物処理のルートとして利用されていることを確認する。	地図の等高線との確認。 断面図のイメージ。  ・飯田町駅の確認  写真利用
展開Ⅱ	現代東京の景観と歴史的結節点 ・高度成長期の変貌 （問）首都高速建設はなぜ短期間で実現したのか。	首都高速を現代の地図上に示す（指示） ・現代の首都高速地図と江戸の地図を対照させる。	（作業） ・地図で首都高速確認。 ・川・運河の上を利用していることを確認。 ・写真
展開Ⅲ	近年の大規模開発  インナーシティ開発と大規模区画  大名屋敷の区画との共通性と土地利用  歴史的経緯の確認 大名屋敷→公共施設→近年の諸状況の変化→再開発	・現代地図上の大規模空間を確認（六本木ヒルズ・ミッドタウン東京・汐留シオサイト・リーパーシティ21など）。  ・江戸時代の地図で大名屋敷の区画に照合されることに気づかせる。 ・大規模な用地として継承 ・諸条件（流通網など）の変化などから役割を終えて再開発の対象となることを示す。	・地図上の大規模空白地を色で塗り分ける。  ・江戸時代の地図と対照する。
まとめ	①「汐留シオサイト」が現在の地域に開発された経緯を説明しなさい。 また、なぜ近年、その地域が開発地として選ばれたのか、背景を考察しましょう。 ②現代の土地利用が歴史的な経緯でさまざまな制約を受けている事実を考慮して、現代に生きる私たちがどのような視点をもって開発を進める必要があるのか考察してみましょう。		・用紙に記載。 →地図中「旧国鉄貨物駅」との記載から流通の変化とのかかわりを意識させる。 →歴史的な視点から、次代を見据えた現代への対処の視点育成を促す。

フュールドワークを通じた2科目連携学習による「地域への主体的思考」を育成するための指導の改善

地理A・日本史A連携授業学習指導案

地理A・日本史A連携授業学習指導案

日時：2010年11月22日（月） 対象クラス（場所）：1年G組（1年G組教室） 授業者：松本至巨  
安井 崇

単元：関東大震災の被害と復興（地理A・日本史A連携特設単元）

本時の目標 1) 関東大震災と復興に関する基本的な事実関係について理解する。  
2) 関東大震災の被害状況と復興について資料に基づいて地理的視点から分析する。  
3) 災害や町並みについて歴史・地理など多様な視点から考察する態度を養う。

主な教材 地理A：『高等学校 新地理A 改訂版』（帝国書院、2007年検定済）  
『詳解現代地図』（二宮書店、2008年検定済）  
『新編地理資料2010』（とうほう、2010年）  
『地理統計要覧2010年版 vol.50』（二宮書店、2010年）  
日本史A：『日本史A 現代からの歴史』（東京書籍、2007年検定済）  
『改訂版 詳録新日本史史料集成』（第一学習社、2008年）  
『新詳日本史』（浜島書店、2006年）

配布資料 プリント1 関東地震と兵庫県南部地震の震源断層と震度7激震域の比較  
関東地震当日12時の天気図（E）、東京市での火災の広がり方  
関東地震要因別死者（E）  
プリント2 関東地震による旧東京市十五区の震度分布図  
プリント3 1460年の東京、日本橋台地の位置と沖積基底の深さ、東京の地形・地質  
プリント4 帝都復興事業の区画整理施行地区、日本橋浜町の区画整理の実施の前後  
浜町公園、京橋川の改修  
プリント5 1万分の1地図「日本橋」（部分）  
プリント6 帝都復興事業により新設・拡張された街路、復興街路、復興小学校構想図  
震災の火の手と焼け止まり  
\*プリント1の（E）以外とプリント2・3はDから、プリント4・6はCから引用。

投影画像 画像1 横網町公園（東京都慰霊堂）現況  
画像2 関東地震当日12時の天気図（E）  
画像3 関東地震による旧東京市十五区の震度分布図（プリント2と同一）  
画像4 東京市での火災の広がり方（プリント1収録のものと同内容）  
画像5 被服廠跡の火災旋風（A）  
画像6 1460年の東京（プリント3と同内容）（E）  
画像7 1万分の1地図「日本橋」（部分）（プリント5と同一）  
画像8 復興小学校・小公園構想図（F）  
画像9 復興小学校・小公園現況  
画像10 京橋小学校すべり台現況

\*アルファベットは資料の出典を示す。出典を明記していないものは安井撮影。

<主要参考文献・Webサイト>

- A 小川益王監修『東京消失 関東大震災の秘録 防災日本列島』（文藝春秋企画出版部、2006年）
- B 小沢健志編『写真で見る関東大震災』（ちくま文庫、2003年）
- C 越澤明『東京の都市計画』（岩波新書、1991年）
- D 武村雅之『関東大震災 大東京圏の揺れを知る』（鹿島出版会、2003年）
- E 『関東大震災80年 THE地震展[国立科学博物館]』（読売新聞東京本社、2003年）
- F <http://www.geocities.jp/zouenkasyudan/52parks/index.htm>（震災復興52小公園）

時間	項目	指導内容	指導の手順と留意事項(*) プロジェクト(◎)・生徒作業(☆)
導入 5分	出欠確認(M)  震災の被害を伝えるもの (Y)	東京都慰霊堂の現況	*地理実習の際のプリント・資料を持参させる（事前指示済み） ◎横網町公園画像投影 この場所はどこか？ これはどのような場所か？
展開 1 20分	関東大震災の概要(Y) (8分)  東京の被害状況(M) (12分)	関東大震災の歴史的意義 ・「大正」と「昭和」の転換点 関東大震災の揺れと被害 ・発生日時・気象状況 ・被害状況 揺れの被害 火災による被害  ・流言飛語による被害 東京の揺れと火災の状況の分析 ・以下の点を確認する 元入江・低湿地は震度が大きい 火災が広がったのは下町の低地	*プリント1配布 ◎当日12時天気図投影 ◎震度分布図投影 ◎火災拡大図投影 ◎火災系統図（黒板に貼る） ◎被服廠跡の火災旋風図投影 *本時は立ち入らない ☆プリント2・3配布 a.とb.の比較検討を行わせる。 a.震度分布地図と地盤地図 b.火災系統地図と色塗り地形図 (作業時間5分程度) 気づいたことをメモ・発表 ◎1460年の東京と震度分布図投影
展開 2 20分	震災復興計画の展開(Y) (6分)  震災を防ぐための知恵 —公園と小学校(M) (12分)  震災復興事業の意義(Y) (2分)	震災復興計画 後藤新平内相の震災復興計画 実施された事業の概要 区画整理、道路・橋の整備 震災復興公園と小学校 復興公園と小学校の立地と構造 ・以下の点を確認する 小学校と公園が隣接して立地 災害時には校舎が防火壁に、公園 が避難場所になる デザイン面での特徴 震災復興事業の意義 都心部・下町に街路・公園整備	*計画縮小の過程については最小限 言及するのみ *プリント4配布  ☆プリント5を配布して作業 中央区周辺の現在の地図を見て、 公園の場所を緑で塗り、公園の周 囲にどのような施設があるか確認 (作業時間5分程度) ◎中央区周辺地図投影 ◎復興小学校・公園平面図と現況画 像投影  *プリント6配布
まとめ 5分	景観と建物が語る歴史 (Y)  授業のまとめ(M)	本校の校舎：復興小学校との共通点 忘れてはならない震災の歴史 ・建物や施設を保存する意味	◎京橋公園滑台画像投影

【資料4】

地理科 学習指導案

日時：2009年11月8日（土）3時限（10時30分～11時20分）

クラス：1年B組（男子22名、女子21名）

場所：1年B組教室（本館1階）

授業者：地理歴史科 松本至巨

単元名「人間生活をとり巻く環境」

【本時のねらい】

1. 6月1日に実施した地理実習で訪れた東京都心部についての地形および水環境について学習し、首都東京の自然基盤について地理実習の体験をもとに理解させる。
2. 自然環境と都市構造がどのような関連性を持っているのかを学び、東京における居住・都市問題といった地域課題について考察させる。
3. さまざまな地図を利用しながら学ぶことで、地図の読み取りなどの地理的スキルを高めるとともに、東京という大都市が成立した歴史的背景についても追究する。

【授業について】

本校地理科では、1年生の1学期に地図の読み取りを中心とする地理的スキルの育成に力を入れている。この中で、6月1日に地理実習を実施し、地図の読み取りや地域調査、情報分析といったことについて体験を通して学ぶように設定している。本時では、「人間生活をとり巻く環境」というテーマで、地理実習で歩きながら感じとった東京都心部の地形的環境に着目しながら、自然環境と都市構造の関連性やさまざまな都市問題について考えさせる。

【使用教材】

教科書：高等学校改訂版地理A（第一学習社、183 第一 地A-012）

地図帳：詳解現代地図（二宮書店、130 二宮 地図012）

副読本：新編地理資料2009（東京法令出版）

統計要覧2009（二宮書店）

指導計画

過程	指導内容	留意点
導入 (3分)	東京都心部の地形について 段彩図をみて、東京の地形が東西で大きく異なっていることを気付かせる。	段彩図(生徒が個々に5月初めに作成したもの(1:25000地形図を着色したもの)を利用する。
展開1 (25分)	東京東部の地形 段彩図を利用して東京東部の地形の特徴を読み取る。 沖積平野について このような地形がどうして形成されたのかを考えさせる。  沖積平野における災害 災害対策についても触れる。	東京東部の標高が低く平坦であることを把握させる。 沖積平野の形成史をわかりやすく説明する。 プリントの図を用いて視覚的に理解させる。 低地における災害について簡単に触れる。 ・洪水、高潮 ・地盤沈下 ・軟弱地盤地域における高層建築
展開2 (20分)	東京西部の地形 段彩図を利用して東京西部の地形の特徴を読み取る。 洪積台地について  谷地について	東京西部の標高が高く起伏が激しいことを把握させる。 洪積台地の形成史をわかりやすく説明する。沖積平野との違いをわかりやすく説明する。 洪積台地が起伏が大きいのは多くの谷地が形成されているためであることを気付かせる。 谷地の形成について説明する。 谷地の具体例として渋谷を取り上げる。
まとめ (2分)	東京の東部と西部で地形に大きな差異があり人間はそれを理解しうまく利用しながら都市を形成していったことを考察させる。	
評価の観点	・東京の地形の特徴を理解できたか。 ・沖積平野および洪積台地・谷地について理解できたか。 ・地形や災害を考慮しながら都市は形成されていることを理解できたか。	

【資料5】

日本史A学習指導案

日時:2009年11月7日(土)3期 対象クラス(場所):1年A組(1年A組教室) 授業者:安井 崇

単元:侵略戦争への序幕 第1時 ワシントン体制と幣原外交  
 第2時 関東大震災と東京の町並み(本時)  
 第3時 田中内閣と山東出兵

本時の目標 1)関東大震災の被害状況について理解する。  
 2)震災復興計画とその実施状況について理解する。  
 3)東京の町並みに関心を持ち、町並みから歴史を発見する態度を養う。

\*授業の趣旨については本公開研究会の要綱も合わせてご参照ください。

主な教材 『高校日本史A』新訂版(実教出版) P.119・P.122  
 『改訂版詳録新日本史史料集成』(第一学習社)、『新詳日本史』(浜島書店)

時間	項目	内容	指導方法・備考
導入 10分	○出欠確認		
	○地理実習の意義 ○女坂の課題の復習	下記の点を確認 1)下町と山の手の境目にある 2)この石段は1924年に作られた →関東大震災に関係	☆女坂の画像を投影 *震災によらない町並みの変化の実例もあえて見せる。
展開 1 15分	関東大震災	関東大震災の歴史的意義 大正から昭和への転換を象徴 関東大震災:地震の概要 気象条件・発生時間・揺れ 関東大震災の被害状況 揺れの被害、火災による被害 流言・飛語による被害 東京における震災被害 東京の地形を確認 →下町と山の手の境を確認 焼失地域と手元の地図を照合 最悪の火災被害:被服廠跡	*大まかに大正と昭和の対比  *基本的事項を手早く確認する ☆図録P.244-2 ☆プリント(火災拡大状況) *流言・飛語の問題は本時は立ち入らない。 ☆プリント(2万5000分の1地形図) 生徒作業(等高線色塗り) ☆帝都大震災火災系統地図 黒板掲示
展開 2	震災復興計画と復興事業	後藤新平内相の震災復興計画 後藤新平の略歴 震災復興計画と反対論 後藤の計画の圧縮	*計画縮小過程の政争には触れない。

10分		震災復興事業の実施 内務省と東京市の協力 区画整理 道路整備、橋の整備 震災復興公園と小学校 震災復興事業の意義 現在の都心・下町の町並みの原型	☆プリント(区画整理対象地域) ☆プリント(道路整備図) ☆プリント(三大公園と復興小学校)
展開 3 10分	震災復興計画の痕跡	震災復興公園の遊具 震災復興公園・小学校 元町公園が原型をとどめる 郊外における震災後の公園  鶴ヶ久保公園の例 歴史的遺産としての町並み	☆京橋公園・元町公園・鶴ヶ久保公園の画像を投影する。
5分	震災復興計画と現在の東京 町並みから歴史を読む	震災復興計画が現在の都心・下町の町並みの原型を形成 町の細部に歴史の痕跡が残る	*町並みへの関心を喚起する

<主要参考文献>

石塚裕道・成田龍一『東京都の百年』(山川出版社、1986年)  
 小沢健志編『写真で見る関東大震災』(ちくま文庫、2003年)  
 越澤明『東京の都市計画』(岩波新書、1991年)  
 武村雅之『関東大震災 大東京圏の揺れを知る』(2003年、鹿島出版会)